



Title	学問名「考古学」の成立
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	阪大日本語研究. 2025, 37, p. 19-50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/101119">https://doi.org/10.18910/101119</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 学問名「考古学」の成立

The establishment of *kōkōgaku*, the Japanese term for archaeology

田野村 忠温  
TANOMURA Tadaharu

キーワード：学問名、「考古学」、「古物学」、archaeology

### 要旨

「考古学」という学問名の歴史に関しては従来考古学の研究者による考察があり、明治12年のヘンリー・フォン・シーボルト『考古説略』で初めて使われたとする見解が早くに示され、それが今なお広く信じられている。その後「考古学」の初出は明治10年の田中不二麿「大森村古物発見ノ概記」であるとする見解が提出され、それに対する反論と再反論がなされたものかみ合わない議論に終わり、以後理解は進んでいない。

従来の考察は全般に素朴で、誤った推論や想像の断定も散見される。また、関心がしばしば「考古学」の初出の局面のみに集中していた。ここでは「考古学」および関連する諸表現の使用状況の調査に基づき、「考古」という語の発生から「考古学」の標準的な学問名としての確立に至る過程全体の解明を試みる。

### 1. はじめに

「考古学」という学問分野名の歴史に関しては従来考古学の研究者による考察、議論があり、その中で「考古学」の成立過程の概略はすでに明らかにされている。しかし、これまでに述べられてきた見解は全般に素朴で誤りも含み、精密化と訂正の余地を少なからず残している。この小論では、「考古学」および関連する諸表現の過去における使用状況の調査に基づき、「考古学」の語史について筆者の考えるところを述べる。また、考古学を表すのに過去に使われたほかの名称の歴史およびそれらと「考古学」の関係についても併せて述べる。

「考古学」は数ある日本語の学問名の中で高度に例外的な存在である。と言うのは、学問名の圧倒的大多数は「言語学」や「歴史学」のように研究対象の名に「学」や「論」を加えて作られているのに対し、「考古学」は研究対象の名によらず「考古」、すなわち、“古を<sup>いにしえ</sup>考える”という当の学問が成す所為に基づいて命名されているからである。同類の学問名はほかに例を見ない。<sup>1)</sup>

## 2. 従来の議論とその問題点

本論に入る前に、まず「考古学」の語史について考古学研究者によって言われてきたことを確認し、その問題点を述べる。

### 2.1. 従来の議論

「考古学」の名の成立に関して、柴田(1924)、和田(1932a, 1932b)、駒井(1951)、角田(1954)、関野(1968)、佐原(1977, 1988)、金関(1985, 1997)、横山(1985)、辺見(1986)、時枝(2006)、大津(2007, 2012)、平田(2008)などの研究において言われてきたことを手短かにまとめれば以下の通りである。

和田(1932a, 1932b) ——これがこの問題に関する以後の考察の基礎を提供した——によれば、archaeology なる学問が日本で初めて紹介されたのは 1877 (明治 10) 年の『百科全書 古物学』——文部省が翻訳出版した『百科全書』シリーズの 1 冊——においてであった。同書では書名にもあるように archaeology は「古物学」と訳された。その 2 年後、ヘンリー・フォン・シーボルト (Henry von Siebold) ——著名なシーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold) の次男、以後「H・シーボルト」と記す——による考古学の概説を翻訳した『考古説略』(1879 (明治 12) 年) では archaeology は「考古学」と訳された。以後しばらく「古物学」と「考古学」がともに使われたが、1895 (明治 28) 年には「考古学会」が設立され、最終的に「考古学」の名に統一された。

archaeology が当初「古物学」とも「考古学」とも訳され、その後「考古学」が選ばれて定着したという和田の説明は信頼を得て今日に至るまで繰り返されているが、『百科全書 古物学』より早く出版された英和辞典に「古事学」という訳語が載っていることを角田(1954)が指摘している。「古事学」は「古物学」と「考古学」のようには普及しなかったため、考古学の名称に関するその後の議論において顧みられることはない。

昭和の後期に至って、佐原(1977)が、1877 (明治 10) 年に文部大輔(次官)田中不二麿の名で書かれた「大森村古物発見ノ概記」という文書に「考古学」が使われていることを指摘し、それこそが『考古説略』での使用に先駆ける最初の用例であると論じた。それに対して、辺見(1986)は「概記」の「考古学」は archaeology を訳したものではないとする批判を発表し、しかし、佐原(1988)は「考古学」の名の初出が「概記」であるという事実は動かないと反論した。その後は時枝(2006)が佐原の反論をそのまま肯定する意見を述べただけで、その問題に関する理解は進んでいない。

## 2.2. 問題点

以上のように要約することのできる従来の議論を見て筆者が感じる主な不足は、短絡的な推論や根拠を欠く断定の傾向が認められるという問題を別とすれば、以下の5点である。

第1は、常に「考古学」が日本で作られた語であるという前提で議論が始まり、近代新語の考察において欠かすことのできない、それが中国からの借用である可能性に関する検討を行っていないことである。もっとも、この問題に関しては、借用がなかったことを明確に証明することはできないものの、日本で明治初年に「考古学」が使い始められた時期までの中国には archaeology に関する著述をほとんど見出せないこと<sup>2)</sup>、その時期までに中国で出版された辞書で archaeology の項目を設けて記述しているのは入華ドイツ人宣教師ヴィルヘルム・ロプシャイト (Wilhelm Lobscheid、中国名羅存徳) による4巻から成る英華辞典 *English and Chinese Dictionary, With the Punti and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』(1866～1869 (同治5～8)年)<sup>3)</sup>——この辞書は近代日本における訳語の生成に大きな影響を及ぼした(沈(1994)、陳(2019))——だけで、そこでは archaeology は「古学」および「論古」(古を論じる)とのみ訳されていること<sup>4)</sup>、そして、中国で出版された辞書で初めて「考古学」の語を掲げたのは筆者の確認の範囲ではパーベル・S・ポポフ (Павел Степанович Попов) によるロシア語-中国語辞典 *Русско-китайский словарь* 第2版『俄漢合璧増補字彙』(1896 (光緒22)年)——археология (アルヒオロギヤ) をそう訳している——であることなどから考えて、「考古学」は現に日本で作られた名称であると判断して差し支えないであろう。<sup>5)</sup>

第2に、考古学を表す名称の使用状況の観察が乏しく、考察が考古学関連の文献の範囲内のごく少数の用例に基づいて行われている。実のところ、初出の時期に限って言っても「古事学」「古物学」「考古学」のいずれも初出は従来言われてきたところから大なり小なりさかのぼり、また、それら以外の名称も多数あった。

第3に、翻訳に密接に関わる問題であるにもかかわらず、観察が日本語の文献に限られており、西洋の出版物や翻訳書の原本の確認がほとんどなされていない。

第4に、多くの場合、関心が「考古学」の初出例の発見、認定に集中している。しかし、語の歴史を理解するには、その発生から変化、ときには衰退に至る消長の全過程を確かめる必要がある。

第5に、語の表す意味の扱いが粗く、佐原は「考古学」の意味を考慮することなくその歴史を論じられるかのように述べる。しかし、語史の理解のためには当然語の表す意味への配慮を欠かせない。辺見は「考古学」の現れを archaeology の訳語であるか否かという基準で二分する考えに基づいて佐原の論を批判している。<sup>6)</sup>しかし、archaeology の理解が時代や国によって大きく異なるとすれば、archaeology の訳語か否かという基準は一定した意味を持ち得ない。

辺見は 19 世紀に日本に伝来した新しい archaeology のことだけを念頭に置いているのであろうが、いずれにせよ「考古学」の語史の理解のためには、それが“古を考える”種々の学問を表すのに使われていた状態と、もっぱら新しい archaeology を表すのに使われるようになった状態とを観察して、両者の関係を考える必要がある。

本小論では、以上のような問題意識に基づいて、「考古学」が現在の意味での学問名として確立するに至った過程を考察する。なお、archaeology に毎回「新しい」という限定を加えるのはわずらわしいので、以後は適宜省く。

### 3. 「考古学」の成立 (1) ——発生から普及まで

これより「考古学」という学問名およびそれに先んじて作られた「考古」という語の歴史について時間の流れに沿って述べる。議論の見通しをよくするために筆者の考えるところの要点をあらかじめ述べれば、「考古学」は、上で触れた通り、当初はその字義に従って“古を考える”学問を広く表していたが、その後考古学会の設立という決定的な外因の作用によって新しい archaeology の標準的な訳語、すなわち、定訳となり、そのことが外延——その指し示す対象の範囲——の縮小をもたらし、結果的にもっぱら archaeology を表すようになった、ということになる。

#### 3.1. 語以前の「考古」

中国語において「考古」という言い回しがいつから現在の用法に近い意味で使われるようになったかは明らかではない。日本での「考古学」の名の議論においても言及される呂大臨『考古図』(1092(元祐7)年自序)——古代の青銅器や玉器多数を記述した書籍——の書名にある「考古」はその比較的古い例であろう。筆者の確認は 1299(大徳3)年序の版による。

そうした中国語の「考古」が日本語の「考古」の基礎になっていることは確実だと考えられるが、両者のあいだには大きな違いがあることに注意が必要である。それは、中国語の「考古」は少なくとも本来動詞句、すなわち、日本語では「考<sub>レ</sub>古<sub>ヲ</sub>」のように訓点を付して「古を考ふ」などのように返読される表現であったということである。

日本語の内部における「考<sub>レ</sub>古」から「考古<sup>こうこ</sup>」への変化は、句から語へという転成の過程である。日本語にはこのように中国語の動詞句に基づいて作られた語——あるいは、それにならって独自に組み立てられた同型の語——が無数にある。例えば、「読書」も現在の日本語においては紛れもなく 1 語であるが、中国語からの借用の段階においては「読<sub>レ</sub>書」、「書を読む」という動詞句であった。その後日本人は「読<sub>レ</sub>書」の 2 字をその中国語の語順のまま字音で読み下す——“直

読”する——ことによって「<sup>どくしよ</sup>読書」という語を作り出し、日本語の語彙の要素としたということである（拙論(2020, 2022))。「考古」という語の成立もそれと同じ過程による。

中国語の「考古」と日本語の「考古」は漢字表記が共通であるために同じものと見てしまいがちであるので、注意を要する。関野(1968)は「『考古』という語は、じつは中国にも、宋代からすでにあった。」と書いているが、句を語と見誤ったものと言うべきであろう。私見によれば、「読書」も「考古」も和製漢語である。

『考古図』という書名は日本ではコウコズ（ないし、カウコズ、カウコヅなど）と読まれたであろうが、江戸中期以前の日本語において「考古」という語が句や文を組み立てる要素として使われていたという事実は確認することができない。ちなみに、『考古図』においても本文には筆者の見落としがなければ「考古」という表現は一度も出て来ない。同書の上記の版に収められた1299（大徳3）年の陳才子による序文には「考古匪玩物也。」という1文があるが、これも“考古は玩物ではない”ということではなく、“古を考えることは物をもてあそぶことではない”ということであろう。

### 3.2. 語としての「考古」

日本語における「考古」という語の形成は、ほかの直読語と同じく、徐々に進行したと考えられる。最初は『考古図』のような書名に含まれる「考古」がコウコと読まれ、漢文中においても「考<sub>レ</sub>古」のように返読されていたのがコウコと直読されるようになり、最終的に日本語の文章や話しことばにおいても「考古」が使われるようになった。

「考古」が漢文中で直読されたことを確かめ得る事例は江戸時代初期から見られるが、「考古学」の語史の観点から特に興味を引く例を挙げれば、<sup>けいざん</sup>丘瓊山編『故事彫龍』（成書年不詳、17～18世紀）——中国の各種古典などを解説した書籍——の和刻本（1725（享保10）年序）では、中国最古の辞書である『<sup>じが</sup>爾雅』の郭璞（<sup>はく</sup>276～324年）による注釈書に関する記述の一節が「考<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>学<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>彬<sub>ニ</sub>彬<sub>ニ</sub>タリ焉」（考古の学の成果が見事に示されている）のように付訓されている。「考古」の字間の連字符はその2字を1語と見なして直読することを示している（<sup>なかだ</sup>中田(1952, 1954)）。この例の存在から、当時の日本人が形式上「考古学」の原初的な形と言える「考古之学」という表現にすでに接していたことも知られる。日本人の著した漢文でも、<sup>よしちか</sup>檜山義慎『花押譜』（1816（文化13）年成島司直序）の凡例に、既存の類書を挙げて「於<sub>テ</sub>考<sub>レ</sub>古<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>学<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>益<sub>モ</sub>最<sub>モ</sub>鴻<sub>ヒ</sub>ナリ矣」（考古の学に大いに益する）と述べられている。

日本語の文章における「考古」の早期の使用としては、『日本国語大辞典』第2版第5巻（小学館、2001年）が、湯浅常山<sup>じょうざん</sup>『文会雑記』（1782（天明2）年宮田明序）における「楊升庵外集も考古のことばかりなり」——『楊升庵外集』は漢籍名——という例を挙げている。

時代が下って明治初年には、昌平坂学問所頭取、江戸幕府目付、外国奉行などを歴任した栗本鯤（別名鋤雲）がその著『匏庵十種 曉窓追録』——「匏庵」は著者の号——において、フランス大統領ナポレオン3世による1867年の第2回パリ万国博覧会の開催を讃えて次のように述べている。ここには「考古」が「攷古」という表記の形で現れる。<sup>7)</sup>以後、用例の引用に際しては句読点の補充を中心とする調整を適宜施す。

宇宙間ノ物品、新ハ以テ知識ノ開クヲ觀、陳ハ以テ攷古ノ具トシ、名ヲ悦目怡心ニ託シ【=目と心を楽しませるという名目で】、（中略）巴里輦轂【=都（れんこく）】ノ下ニ来リ集ラシム。<sup>8)</sup>

（栗本鯤『匏庵十種 曉窓追録』、1868（明治1）年題言、1869（明治2）年刊）

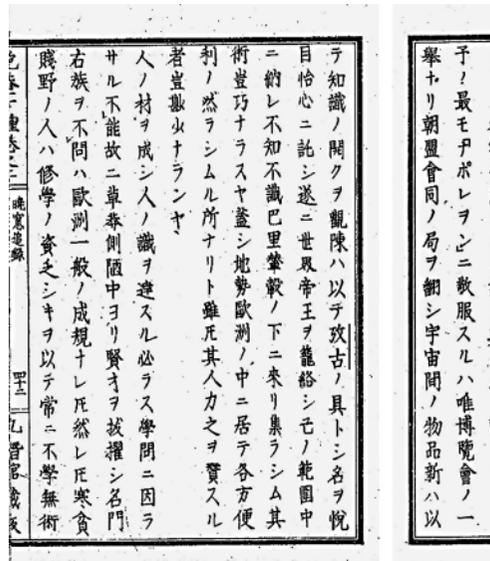


図1 栗本鯤『匏庵十種 曉窓追録』（国立国会図書館蔵）<sup>9)</sup>

栗本は巻頭の「題言」によれば幕末に1年近くパリに住んでおり、当該書は現地での見聞などを綴ったものである。上のくだりでは、博覧会の展示品のうち現代のものからは新しい文化の発展を知ることができ、古いものは“古を考える”手立てとすることができると説明している。「攷古」がフランス語の *archéologie* を念頭に置いて使われた表現であると断定することはできないが、栗本は幕府使節の補佐のために博覧会に参加しており、フランス語の少なくとも基礎知識はあったと見られ——書中に例えば凱旋門の名 *Arc Triomphe* を片仮名で記し、その字義を説明している——<sup>10)</sup>、また、上に引用した文の内容から考えても、その可能性は十分にある。

これに続く例は辺見（1986）の指摘にある、文部省の前身である大学が太政官に対して古器旧

物の保全の措置などを願ひ出た上申書（1871（明治4）年）に見られ、そこでは社会の変革が「厭旧尚新ノ弊風」を生じて「考古ノ微抛トモ可相成物<sup>(あいなるべき)</sup>」が失われつつある状況が説明されている。それを受けて同年に発せられた「古器旧物ノ類」の保全に関する太政官布告においても、対象とされた物品の列挙の1項目に「一古書籍並古経文ノ部温古ノ書籍図書及古版古写本其他戯作ノ類ト雖トモ中古以前ノモノニテ考古ニ属スル者等」と書かれている。<sup>11)</sup>ただし、それらの文書は日本に archaeology の知識がもたらされる前の時期のものであり、辺見も言う通りそれをふまえたものではないであろう。

手紙文例集である伊藤信平『開化文章』（1873（明治6）年）<sup>12)</sup>にも「考古」が見出される。同書は「新規の漢語を文章の贈答に綴り、傍に傍仮名を附し、文意を釈し、幼童をして窮理且西洋の時勢を發明なさしむる為に書輯めける」ものである——ここに言う「發明」は新しいものを考え出すということではなく、“悟る”、“発見する”という旧義を表している（張(2023)）——。「幼童をして」という説明は修辞に過ぎず、実際には成人を対象とした手紙文例集である。同書中に「博覧会誘引を謝る書」と「右に答る書」という対を成す文例がある。前者は相手から博覧会への同行を誘われたことに感謝し、体調を崩して行けないが、博覧会の様子を書面で聞かせてほしいと述べたものであり、後者はその求めに応じて博覧会での展示品を詳しく答えたものである。その答書の最後は次のように締め括られている。

先生御快気次第仰<sup>あなぎ</sup>、随行<sup>こぶ</sup>、質問是正を請て筆記、考古、博物の遺忘に備度、此而已千禱万祈  
仕居候。（伊藤信平『開化文章』、「右に答る書」、1873（明治6）年序）

相手が健康を回復すれば博覧会に同行して教示を得て書き留め、“考古、博物の遺忘に備えたい”と言っている。この文例の対は1872（明治5）年に文部省が開催した湯島聖堂博覧会を題材に取ったものと見られる。当該書は読者に「西洋の時勢」を理解させることを1つの目的としており、答書に記された展示品には「普国進献の鉄人」——プロシア（普魯西）から贈られた鑄像の類か——のように西洋のものも含まれる。しかし、ここでの「考古」の語が archaeology をふまえた表現であるとまでは言えないであろう。

以上のように、当初返読されていた漢文中の「考<sub>レ</sub>古」という動詞句が「考-古」として直読されるようになり、明治初年までにはそれが日本語の文章においても語として普通に使われるようになった。ただし、日本にまだ archaeology が紹介されていなかったこの時期には、その知識の反映と確実に言える「考古」の用例は見出せない。

1874（明治7）年には、「考古学」と表現上同等と言える「考古ノ学問」という言い回しの用例が見られる。英国の百科辞典 William and Robert Chambers (eds.) *Chambers's*

*Information for the People* (1835年初刊)の‘Physical history of man — Ethnology’という項目を訳した文部省刊行の『百科全書 人種篇』に次のようなくだりがある。

人種論ハ地質学ト同ク之ヲ考古ノ学問ト為スベシ。又人種論ニ於テ地球上ノ人類ヲ査究スル方法ハ地質学ニ於テ地層ヲ考察スル方法ノ如ク為シテ人類ノ同一種族タルモノヲ決シ、或ハ往古未タ記載アラザル時ニ当テ其人類ノ漂泊遷移セル事跡ヲモ著スニ足レリ。

(秋山恒太郎<sup>こうたろう</sup>訳『百科全書 人種篇』巻之上、1874(明治7)年)

この第1文の原文を確かめてみると“Ethnology is thus a palaeontological science, analogous to geology.”であり<sup>13)</sup>、「考古ノ学問」は a palaeontological science を訳したものであることが分かる。現在一般に「古生物学」と訳される palaeontology と archaeology は研究の対象が生物か人造物かという点で異なるものの、上の引用にもある通り研究の目的と手法には共通するところが多い。

### 3.3. 「考古学」の発生と普及

さて、「考古学」という3字語の初出例は、筆者の確認の限りでは、1875(明治8)年に出版された書籍中に見出される。フランスの哲学者モンテスキュー(Charles-Louis de Montesquieu)の著した*De l'esprit des lois*(法の精神)の英訳版*The Spirit of Laws*(1873年)の日本語重訳版である『万法精理』にそれが現れる。

<sup>(ハンノ)</sup>漢那【=紀元前5世紀ごろの航海者】ノ航海紀ハ即チ実践親履セル人ノ手ニ出テシモノナレハ、考古学ニ於テ甚タ貴重スヘキ遺書ナリ。

(『万法精理』巻之廿一、「第十一回 <sup>(カルタゴ)</sup>加達義及<sup>(マルセイユ)</sup>ヒ馬塞爾ノ貿易ヲ論ス」、1875(明治8)年)

これの原文は“The relation of Hanno’s voyage is a fine fragment of antiquity. It was written by the very man that performed it.”(ハンノの航海の物語は古代のすばらしい断片である。それは航海を行った人物自身によって書かれたものである。)であり、そこに学問名は出て来ない。訳者は“航海記が古代のすばらしい断片である”という話を“古代の考察において非常に有用な記録である”と意識していることになる。すなわち、“古代の考察”、“古を考える学”を「考古学」と表現しているということである。

翌年の『民法論綱』における「考古学」が表すものも現代のそれとは明確に異なる。

考古学ノ一科ハ今日ノ時勢ニ害アル効果ヲ結フモノト謂ハサルヲ得ス。其所以ヲ陳述センニ、少年輩ハ齟齬(ちようしん)ノ時【＝乳齒の抜け替わる7～8歳の年頃】ヨリ学校ニ入りテ、羅馬史(ローマ)ヲ読ミ彼ノ人民カ公然ト不義悪行ヲ恣ニシ、而シテ其邪惡ヲ掩ハンカ為メ特ニ口実ヲ附会シテ之ヲ羅馬人ノ德行ナリト賛美スルヲ目撃スルナルヘシ。 (ビ・ベヌザム著、何礼之訳『民法論綱』卷三、「第十五回 安固ヲ侵スノ類例」、1876(明治9)年)

この「考古学ノ一科」は Jeremy Bentham の論文 'Principles of the civil code' の原文においては classical education であり<sup>14)</sup>、“古典の教育”を意味している。そして、上の引用に見る通り、ローマ史ではローマ人の悪行が美化して語られるために、そのような古典の学問を学校教育の科目とするのは有害だと論じている。

1877(明治10)年の2月には和田(1932a)以来広く知られている『百科全書 古物学』——*Chambers's Information for the People* (前出)の項目 'Archaeology' の翻訳——が出版された。<sup>15)</sup> 考古学について述べた書籍で書名に「古物学」をうたったものはほかにない。archaeology を「古物学」と訳す同書に「考古学」の名は出て来ないが、後の議論に重要な関わりを持つ巻頭の一節をここに引用する。

アルケオロジ古物学ト云ヘル語ハ(中略)其真正ノ字義ハ汎ク上古ノ事物ヲ講明スルノ意ヲ蘊有スルガ故ニ、現今ハ則チ是語ノ最モ広大ナル意義ニ因ツテ之ヲ用キ、往昔ノ遺蹟遺物ニ憑拠シテ上古ノ沿革史記ヲ演繹スル所ノ学科ヲ総称シテ古物学ト呼做スニ至レリ。近世此名ヲ以テ上古ノ事物ヲ考索スルノ学科ニ命シタルノ期ハ、即チ此学科モ亦其面目ヲ一新シ、論理学上ノ帰納法ニ根拠シテ明確闊大ノ系統ヲ創成セルノ時ナリ。

(柴田承桂しょうけい訳『百科全書 古物学』、1877(明治10)年)

この話の前段の要点は“archaeology の用語は今では古代の事物の記述 (the description of ancient things) 全般を表すのに使われる”ということであるが、後半はとうてい理解できない訳文で、しかも、実は原文にある要素が省かれてもいる。後半は原文に忠実に訳し直せば“近年好古家の探求 (the pursuits of the antiquary) を特徴付けるのにこの archaeology という用語が採用されたことは、古物の研究 (the study of antiquities) が哲学的帰納法に基づく知的かつ包括的な体系になった新時代(が訪れたこと)を示している”ということである。<sup>16)</sup> 『百科全書 古物学』の翻訳では、原文で文法上中核的な位置を占めている“好古家の探求 (the pursuits of the antiquary) を archaeology の名で呼ぶ”という説明が訳出されていない。archaeology と antiquary を結び付けたこの説明は、1770年から2世紀以上にわたって雑誌 *Archaeologia*:

*Or Miscellaneous Tracts Relating to Antiquity* を刊行したのが the Society of Antiquaries of London という名称の組織であることにも符合している。<sup>17)</sup>

同年の12月には佐原(1977)が着目した田中不二麿名の「大森村古物発見ノ概記」という文書——エドワード・S・モース (Edward Sylvester Morse) による大森貝塚の発見について述べている——に「考古学」が現れる。<sup>18)</sup> その文面は「考古学ノ世ニ明ラカナラサルヤ久シ。」で始まり、「<sup>(きき)</sup>曩ニ漸ク古物学ノ一派欧米各国ニ起リヨリ、古代ノ工様ヲ今日ニ徴スヘキ者ハ普ク之ヲ採集シテ博物館ニ貯蔵シ、或ハ之カ為メ特ニ列品室ヲ設ル等、競テ下手セサルハナキニ至レリ。」と続く。「考古学」は世間でほとんど忘れ去られて久しいが、昨今欧米諸国には「古物学」の学派が起り、古物の収蔵、展示が流行していると説明している。辺見の論じる通り、ここでの「考古学」は新しい archaeology の導入以前の方法による古物研究を指していると考えられる。ただし、ここでの「考古学」の名の使用は何ら特別なものであるわけではない。「考古学」が外延を縮小してもっぱら archaeology の訳語として使われるようになるまでの期間にあっては、その名は“古を考える”学問を広く表していたのであり、「概記」の著者は archaeology を『百科全書 古物学』でも使われた「古物学」によって訳し、それとは異なる旧来の研究を「考古学」として呼び分けたまでであった。「概記」における「考古学」の使用をそのように理解すべきことは、後に見るほぼ同等の記述の存在からも確かめられる。

archaeology を表す「考古学」の名の初出に対する関心から特に注目すべき用例が1879(明治12)年2月に見出される。『朝野新聞』に不定期に連載された第3回パリ万国博覧会——1878年の5月から11月にかけて開催された——の報告記事の1件中に「考古学」が現れる。引用の冒頭にある「トロカデロ」は博覧会の主会場名 Trocadéro である。

本回トロカデロ古物ノ博覧会ハ実ニ盛大ナルモノト云フベシ。是迄万国博覧会ニハ多少古物ノ陳列アリト雖トモ、同日ニ論ズベカラズ。亦以テ西洋今日考古ノ学盛ナルヲ推知スベシ。西洋考古学ノ状ヲ察スルニ、其学ハ一ナリト雖トモ、其ノ主意ハ二箇ノ別アルヲ見ル。其一ハ実物ニ由リテ古来各国治乱興亡ノ沿革ヲ知ルニ在リテ、全ク学問上ノ目的ニ出ヅ。其二ハ古来ノ物品ト現今ノ物品トヲ比較シ其ノ沿革、製法ヲ知ルニ在リテ、専ラ工芸上ノ目的ニ出ヅ。第一科ノ要ナルハ論ナシト雖トモ、第二科ハ勸業上実ニ欠クベカラザルモノトスベシ。

(「仏国博覧会景況略報(前号の<sup>(ママ)</sup>続)」、『朝野新聞』1879(明治12)年2月1日)

ここでは「考古ノ学」とそれを縮めた「考古学」という2つの表現が使われている。博覧会の充実した展示内容から西洋の考古の研究が盛んであることが分かるという話である。この記

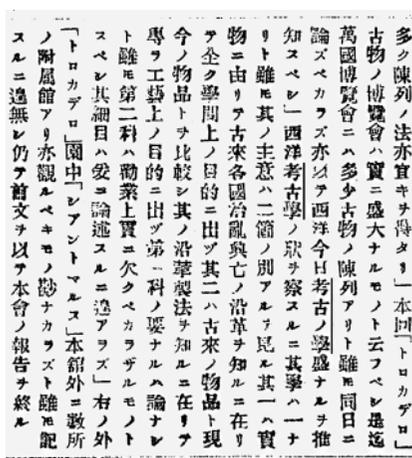


図2 『朝野新聞』所載のパリ万博報告記事（東京大学明治新聞雑誌文庫蔵）<sup>19)</sup>

事だけからでは「考古学」がどのような意識で使われたものかよく分からないが、会期中の10月21日に開かれた授賞式における「農商卿」（農商務大臣）の挨拶中に次のようなくだりがある。

トロカデロニ設ケタル古物及ヒ人種学ノ物品ハ歴史家、考古家ヲシテ緊要ノ材料ヲ得セシメ、又世人ヲシテ古來開化ノ状態ヲ目下ニ知得セシメタリ。<sup>20)</sup>

（「仏国博覧会々場略報 農商卿演説（一昨日ノ続）」、『朝野新聞』同年1月15日）

ここには「考古学」の語は出て来ないが、「トロカデロニ設ケタル古物及ヒ人種学ノ物品」というくだりは、博覧会の報告書 *Rapport administratif sur l'exposition universelle de 1878 a Paris* 第1巻（1881年）の記述と照らし合わせてみると、博覧会に考古学、人種学関係の展覧会場（sections d'archéologie et d'ethnographie）が設けられたことを受けたものであることが知られる。博覧会前に出版された *Matériaux pour l'histoire primitive et naturelle de l'homme* 第2集第8巻（1877年）に掲載された当該の展覧関係の記事では、先史考古学・人類学（archéologie et anthropologie préhistoriques）の分野の出品予定物が第3紀、第4紀などに分けて記述されている。また、*Bulletin de la Société archéologique, scientifique et littéraire du Vendômois* 第16巻（1877年）に掲載された記事には、展覧が人類学会を中心とする体制で行われ、先史考古学・人類学国際会議の創始者であるガブリエル・ド・モルティエ（Gabriel de Mortillet）が事務局長を務める予定であることなどが記されている。

以上の確認により、パリ万博の報告記事に現れる「考古学」は確実に archéologie、英語で言えば archaeology の訳語であると判断することができる。当の記事は archaeology の何たるか

を説いたものではないが、1879（明治12）年2月1日の出版であるので、そこでの「考古学」の出現は同年6月に出版されたH・シーボルトの『考古説略』における「考古学」の出現よりわずか4～5か月ながら早く、筆者の確認の限りにおいて新しい archaeology を表す「考古学」の最も早い用例であることになる。

念のために併せて確かめれば、出版だけでなく執筆の時期もおそらく『朝野新聞』の記事のほうが『考古説略』より早い。当の記事に続いて4日後の2月5日に載った記事には「本会閉場ノ期日ハ去十月三十一日限リナリシガ故アリテ本月十日迄ノ延期トナレリ。」とあるので、「考古学」を含む記事は遅くとも1878年の11月までに書かれたとほぼ確実に言える。他方、『考古説略』は序文には1879年3月の時間が記されているが、翻訳が行われた時期は不明である。しかし、同書は書籍と言っても訳文は400字詰め原稿用紙換算で50枚弱の分量——すなわち、現代の雑誌論文1件程度の量——に過ぎず、翻訳に何か月もの期間は要していないであろう。

『考古説略』における「考古学」の使用は和田(1932a)以来広く知られている。吉田正春による「緒言」は「考古学ハ欧洲学科ノ一部ニシテ、其課ヲ尚ホニツニ區別シ其一部ヲ事物考古学、又其一部ヲ風俗考古学ト称ス。」で始まり、本文でも「考古学」のほか「考古学者」「考古学研究」「考古引証」などの表現が使われている。ただし、『考古説略』の翻訳者は不詳である。大多数の研究者が吉田正春を翻訳者とするが、その名は緒言には書かれているものの本文には書かれていない。したがって、大津(2007, 2012)が指摘する通り、同人が翻訳者であった可能性は十分に想定できるにせよ、そう断定できるわけではない。

『朝野新聞』の記事における「考古学」という訳語の使用が判明した今、誰が初めて archaeology を「考古学」と訳したのかということがあらためて問題となる。真相はおそらく、その訳法がすでに一部の関係者のあいだでそれなりに普及していたか、『朝野新聞』の記事と『考古説略』とで互いに独立に「考古学」と訳された——「考古学」はすでに“古を考える”学問の名称として普及しかけていた以上、それは十分にあり得る——かのいずれかであろう。<sup>21)</sup>しかし、この問題の解決は新たな証拠の発見に待たなければならない。

このころに出版された西洋史に関する翻訳書『泰西史鑑』では、原文の antiquity が「考古学」と訳されている。

ルドルフ<sup>(ドイツ)</sup>路徳尔弗第二父ノ後ヲ承ケテ徳意志ノ帝位ニ登ル。帝学文ヲ好ミテ知識アリ。(中略) 帝殊<sup>アンチクワイテイ</sup>ニ安底幾的〔考古学〕、星学<sup>アルキミイ</sup>、亜基米〔黄金ヲ錬造スルノ術〕ヲ好ミ、其精神ヲ是等ノ学ニ専ニシテ、其身ノ職掌ナル国事ニ於テハ心ヲ用フルコト反テ精ナラズ。

(ウエルテル原著、西村茂樹重訳『泰西史鑑』下編卷之三、1878（明治11）年ごろ)<sup>22)</sup>

『考古説略』と同年に出版された人名辞典である『西洋人名字引』には「考古学者」という語が現れる。

ペンナント（トーマス）【=Thomas Pennant】ハ英国ノ博物学士ニシテ且ツ考古学者ナリ。  
 （吉田五十穂<sup>いかほ</sup>訳『以呂波分<sup>わけ</sup>西洋人名字引』、1879（明治12）年）

底本の *Chambers's Encyclopedia: A Dictionary of Universal Knowledge for the People* 第7巻（1872年）における原文では Thomas Pennant は “tourist, naturalist and antiquary” と説明されているので、ここでの「考古学者」は antiquary を訳したものである。antiquary は現代の辞書に書かれている「古物収集家」「古物愛好家」、「骨董商」「古美術商」などの訳語の感覚で考えると archaeology から縁遠い印象があるが、『百科全書 古物学』の原著でも archaeology が明確に “the pursuits of the antiquary” ——上では「好古家の探求」と訳した——と説明されていたことから分かる通り、archaeology は学問で antiquary は好事家や商売人だというような排他的な関係にあったわけではない。antiquary の行う近代的な方法による探求が archaeology だというのが同書の説明であった。

1880（明治13）年の2月には、2件の文献に「考古学」の使用が見出される。まず、仏国博覧会事務局『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』の「第一篇 博覧会総論」「第七章 古物館之事」には上で見た『朝野新聞』の記事がほぼそのままの内容で収められている。筆者の見落としがなければ『朝野新聞』における連載記事にはなかった記述で「考古学」を含むくだりには次のようなものがある。

文学大学校 全国中二十五校アリテ、其科目ハ仏国古文、外国古文、能弁学、性理学、歴史、地理、考古学等ナリ。

（仏国博覧会事務局『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』、1880（明治13）年）

また、モースの指導を受けた東京大学理学部の学生2名による論文にも「考古学」が現れる。<sup>23)</sup>

【理学の研究が日増しに盛んになっているが】独り考古学ノ如キハ近世ニ至ルマデ数人ヲ除クノ外殆ント其道ヲ絶チテ復タ講究スル者ナク、而シテ其古来古物家ト称スル者ノ如キハ僅ニ古器物等ヲ蓄蔵シテ玩具トスルニ過キサル<sup>(のみ)</sup>而已。<sup>(さきに)</sup>（中略）曩者生物学教授米人モールス氏本邦ニ渡来シ、始メテ大森介墟ヲ発見シ、墟中ニ埋蔵セル器物ヲ集収シ、乃チ検定シテ往古大森人種ハ何ノ風習ヲ守リシ者ナルヲ証セル以来、考古ノ学漸ク世ニ顕ハレテ世人ノ之

ニ従事スル者日ニ多キヲ加フルニ至レリ。

(佐々木忠三郎・飯島魁<sup>いざお</sup>「常陸<sup>フカタヒラ</sup>平介墟報告」、『学芸志林』第31冊、1880(明治13)年)

この論文は「大森村古物発見ノ概記」の「考古学」との関係において重要な意味を持つ。上のくだりは“考古学が最近まで廢れて研究する者がほとんどいなかったが、モースによる大森貝塚の発見と考察以来、考古の学が徐々に人々の関心を引くようになり研究する者が増えてきた”と言っている。旧来の研究と新興の研究を「考古学」と「考古ノ学」という意味上同等の名で呼んでいるが、2段の構成を持つこの話の前段は、明らかに内容上「概記」の「考古学ノ世ニ明ラカナラサルヤ久シ。」に対応し、後段は「曩ニ漸ク古物学ノ一派欧米各国ニ起リシヨリ(中略)競テ下手セサルハナキニ至レリ。」に対応している。

『学芸志林』の論文は、古物に関わる旧来の活動のうち少数人による価値ある研究をそれ以外の収集趣味の類から区別して「考古学」の名で呼んでいる。著者たちの意識において、そのような研究もモースに始まる新しい手法による研究とともに、“古を考える”学問、「考古(ノ)学」であったわけである。それに対して、「概記」の著者は旧新の学問を「考古学」と「古物学」によって呼び分けたわけであるが、「概記」も『学芸志林』の論文も旧来の古物研究を等しく「考古学」と呼んでいることにおいては共通である。

以上において見てきた時期を過ぎると「考古学」の出現が増える。ここでは注目に値する3件の文献に簡単に触れるにとどめる。

まず、翻訳による学術用語の普及に大きな影響を与えた井上哲次郎他編『哲学字彙』(1881(明治14)年)は<sup>(ママ)</sup>archeologyを「古物学」と訳し、「考古学」は併記していない。明治10年代には「考古学」より「古物学」のほうが優勢であったので(後述)、そのことの反映と理解することができる。

次に、一般的な外国語辞典では19世紀末までarchaeologyは多く「古物学、古事学」と訳された。辞書における「考古学」の出現として確かめることのできた最も早い例は高良二・寺田勇吉訳『独英和三対字彙大全』(1886(明治19)年)で、そこではArchäologieが「考古学、古物学」と訳されている。<sup>24)</sup>

また、先に見た『西洋人名字引』ではantiquaryが「考古学者」と訳されていたが、次の例においてもそれに相当するフランス語のantiquaireが「考古」を使って訳されている。

巴里府ニ於テハ千八百七年ニ設立セル所ノアカデミー・セルチーク【=Académie celtique、ケルト・アカデミー】アリ。(中略)此院ハ現今仏国考古学士院<sup>ソシエター、デ、アンチ</sup> <sup>クイニル、ド、フランス</sup>【=Société des antiquaires de France】ト合併セリ。

(東京学士会院『<sup>アカデミー</sup>各国学士院紀略』、「仏国学士院」、1880(明治13)年)

以上3節全体の考察を要すれば、江戸時代初期までに漢文の「考古」を直読して作られた「考古」という語がその後日本語の文章でも使われるようになり、『万法精理』（1875（明治8）年）に初出を確かめることのできる「考古学」の名称は当初“古を考える”という条件に合致するさまざまな学問を言うのに使われた、そして、新しい archaeology を表す「考古学」の最も早い使用は確認の限りにおいて1879（明治12）年2月1日に『朝野新聞』に掲載された第3回パリ万博の報告記事「仏国博覧会景況略報（前号の続）」に見出される、ということになる。

しかし、archaeology を言うのには当初「古物学」という訳語のほうが多く使われていた。「考古学」が「古物学」に取って代わって定訳化した段階について考える前に、archaeology の異訳の歴史について理解を得る必要がある。

#### 4. 「考古学」以外の名称

「考古学」以外の archaeology の訳語のうちで最もよく使われたのは「古物学」であるが、それ以外にも多数の異訳があった。それらの歴史を一通り確かめる。

##### 4.1. 「古事学」

従来一般に、archaeology は日本語では「古物学」ないし「考古学」と訳され、最終的に後者が選ばれて定着したと説明されてきたが、両者より早く「古事学」という訳語が作られたことを角田(1954)が指摘している(2.1)。

角田は「古事学」の訳語がノア・ウェブスター(Noah Webster)の辞書に基づいて編まれた荒井郁之助編『英和对訳辞書』(1872(明治5)年)で初めて使われたと書いているが、実際にはその前年の前田正毅・高橋良昭編『大正増補和訳英辞林』(1871(明治4)年)においても使われている。この訳語はその後多数の英独仏語の辞書に継承された。

通常の文章中における早い使用としては、『和氏授業法』(1879(明治12)年)—— Alfred Holbrook *The Normal: Or Methods of Teaching the Common Branches* 第4版(1869年)を翻訳したもの——は、「文学」を下位区分して「史学」の下に「古事学」があるとし、「古事学トハ古人及其知識、旧習、風俗等ヲ主トシテ論述スル学派ナリ。」と説明している。この「古事学」は archaeology の訳語として使われたものではあるが、原文にも詳しい説明がなくどのような archaeology を念頭に置いて書かれたものであるかは不明である。

また、教育学の事典である小林小太郎訳『教育辞林』第一冊(1882(明治15)年)—— Henry Kiddle and Alexander J. Schem *Encyclopedia of Education* (1877年)の翻訳——も、「古事学<sup>アルケオロジー</sup> Archaeology 古事学ハ古代ノ學術ヲ推究スルノ学ニシテ、広ク其義ヲ論スルトキ

ハ歴史、神伝、古代ノ政治、宗教、貿易、工業、文学、美術ニ至ルマテ悉ク之ヲ包括セサルナシ。然レトモ今日ニ於テハ大ニ此積義ノ制限ヲ定メ、特ニ亜米利加<sup>(アメリカ)</sup>ニ於テハ人間太古ノ時代ヲ探求シ且專<sup>(もっぱら)</sup>一國初民ノ歴史、風俗及ビ遺跡ヲ究察スルノ学ヲ稱シテ古事学ト曰フ。」云々と説明している。こちらは研究対象の変遷や遺跡への言及があることから考えて、おそらく新しい archaeology も視野に入れたものであろう。

archaeology との対応が明示されていないものも含めれば、それらしき用例はいろいろと見られる。しかし、「古物学」と「考古学」に比べると出現の頻度は低く、それらに張り合うだけの勢力を得ることはなかった。

#### 4.2. 「古物学」

和田(1932a)によれば、archaeology の学問が日本で初めて紹介されたのは1877(明治10)年の『百科全書 古物学』においてであった。そして、「古物学」という訳語は同書の翻訳者である柴田承桂が作ったと和田を含む複数の考古学研究者が説明してきた。

アーケオロジが我邦に伝へられ公にされたのは、明治十年文部省が百科全書九十二篇を邦文にて印行したときであつて、この中に古物学と云ふ一篇が一冊として印行せられて居る。これはアーケオロジが柴田承桂氏によりて古物学と訳せられた。(和田(1932a))  
博士【=柴田承桂】の博識は愕くべきものがあつた。漢学にも素養が深かつたせみもあつて、博士の訳語にはすぐれたものが多かつた。『薬剤師』、『花柳病』、『古物学』などは、いづれも博士が造られた訳語であつた。(角田(1961b))

明治十年(一八七七)には、柴田承桂がアーケオロジを『古物学』と訳して出版し、(後略)(関野(1968))

【『百科全書 古物学』の】翻訳者は柴田承桂であつた。(中略)この翻訳は、いかにも科学者らしく几帳面であつたようである。たとえば Archaeology をその語義の通りに古物学<sup>25)</sup>と訳したことも、その一つのあらわれであるといえる。(斎藤(1974))

しかし、こうした論は、陳(2011)の言う「名人造語説」、すなわち、近代新語の早い用例が有名な知識人の著述中に見出されれば根拠もなく当人が造語者だと考えてしまう短絡的な思考の事例にはかならない。実際、角田と斎藤は柴田を「古物学」の造語者とするにとどまらず、その学識をふまえて——同人は東京医学校(東京大学医学部の前身)の初代製薬学科教授を始めとする要職を歴任している——その造語を讃えている。

「古物学」は『百科全書 古物学』で初めて使われたわけではない。その初出はそれよりも少

なくとも5年早く、吉田賢輔編『英和字典』（1872（明治5）年）<sup>26)</sup>は archaeology を「古物学」と訳している。翌年に出版された柴田昌吉・子安峻編『附音挿図英和字彙』（1873（明治6）年）は archaeology を「古物学、古事学」と訳している。

通常の文章中における「古物学」の早い時期の使用としては、文部理事官田中不二麿らによる欧米諸国の教育制度の調査報告書である『理事功程』巻之七「仏国ノ四」（1873（明治6）年）の「文部省諸用度」（文部省諸経費）において、「ナショナル書庫」（Bibliothèque nationale、国立図書館）の項目に列挙された経費の1つとして「古物学教授一人 七千五百フランク【=フラン】」という人件費が書かれている。C. Vraye *Le budget de l'état*（国家の予算）（1875年）——「文部省諸用度」の記述は同書の早い年の版（筆者未見）に基づくと推定される——の該当する箇所には professeur としか書かれていないが、「ナショナル書庫」に professeur d'archéologie の職があったことは多くの資料で確かめることができるので、「古物学教授」はその表現を訳したものと考えられる。『理事功程』の「古物学」は、『朝野新聞』の記事の「考古学」と同じく archaeology の解説は伴わないものの、『百科全書 古物学』の「古物学」より4年早いことになる。モロー・ド・ジョンネ（Moreau de Jonnés）著、箕作麟祥訳『統計学』（1874（明治7）年）も原文中の archéologie を「古物学」と訳している。

「古物学」が『百科全書 古物学』より何年も前から archaeology の訳語として複数の辞書に書かれ、実際の文章にも使われていた以上、柴田造語説はもはや成り立たない。柴田は辞書に書かれた訳語を使ったのであろう。角田の挙げる「花柳病」も、ロプシャイトの『英華字典』（2.2）における syphilis（梅毒）の訳語の1つである「花柳症」に実質上等価である。

では、吉田賢輔編『英和字典』は archaeology の語に対して考古学研究者の賞賛する「古物学」という訳語をいかにして与えることができたのか。日本に archaeology が導入される前の時期の辞書編集者が考古学の研究法を理解していたということはある得ない。しかし、その事情は実はまったく簡単である。吉田が序文に書いているところによれば、同辞典は「英人ニユツタル氏ノ字典ヲ本トシ傍ラウエブストル氏ノ大字典ニ就キ務メテ応用ニ切ナル語ヲ訳出」という方法、方針で編まれた。Peter Austin Nuttall *The Standard Pronouncing Dictionary of the English Language*（1863年）——編者の姓は「ニュツタル」ではなく「ナトール」のような発音である<sup>27)</sup>——を確かめると、archaeology は“The science which relates to antiquities in general; a discourse on antiquity.”と説明されている。ウェブスターの辞書は版が多いが、ある版では archaeology は“Science of antiquities; a treatise on antiquities.”と簡潔に説明されている。それらの語釈に含まれる antiquities を「古物」と訳し、それに science を訳した「学」を加えることによって「古物学」の訳語は作られたのであった。<sup>28)</sup>

「古物学」の名はまず辞書に記載され、それが人々による使用を先導したと見られるのに対し、

「考古学」の辞書への記載は先に見た通り同語の普及後の19世紀終盤に始まった。両語は普及と辞書への掲載の先後関係に関して明確な対比を成している。

「古物学」は、「考古学」もそうであったように、もっぱら archaeology の訳語として使われたわけではない。傍木<sup>そばき</sup>哲二郎編訳『明治新撰和訳英辞林』(1885(明治18)年)は archaeology と paleology (古遺物研究) をともに「古物学」と訳している—— archaeology を「古物学、古事学」、paleology を「古物学、古器論」としている——。

また、「考古学者」が antiquary の訳語として使われた事例があることを先に見たが、「古物学者」にも同様の例がある。

The Antiquary. (古物学者) ワーター・スコット【=Walter Scott】

(『西洋小説百種(其一)』、『国民之友』第91号、1890(明治23)年)

『附音挿図英和字彙』も antiquary と同義の antiquarian を「好古家、古物学者」と訳している。

#### 4.3. 「古器物学」「古学」「古史学」「好古学」など

archaeology の訳語は従来知られていた「古事学」「古物学」「考古学」の3つだけではない。ほかにも「古器物学」「古学」「古史学」「好古学」など多くのものがあった。

そのうちで最も普及したと見られるのは「古器物学」で、例えば、『東京大学第一年報』(1882(明治15)年序)の「博物場ノ事」、鬼窟主人「ソル、ジヨン、ラボック氏ノ略伝」<sup>29)</sup>(『東洋学芸雑誌』第20号、1883(明治16)年)、加藤弘之「貧叟百話」(『太陽』第2巻第16号、1896(明治29)年)中の「第二史学研究の心得」に使用が見られる。

「古学」については、津田仙<sup>せん</sup>・柳沢信大<sup>しんだい</sup>・大井鎌吉訳『英華和訳字典』(1879(明治12)年)が archaeology を「古学、フルキコトヲセンサクスルガク」と翻訳、説明している。同辞典はロプシャイトの『英華字典』(2.2)を和訳したものであり、「古学」の訳語もそこから取られたものである。『華英字典』、『華英和訳字典』ともに「古学」を paleology の項目でも訳語の1つとして使っている。「古学」の文章中における使用としては、先に触れた『百科全書 人種篇』(3.2)の巻之下で原文の archaeologists が「古学者」と訳されている。また、大森貝塚について論じたモースの著書 *The Shell Mounds of Omori, Japan* (1879(明治12)年)の翻訳書『大森介墟古物篇』(同年)では原文の archaeologist が1か所で「古学家」と訳されている。ただし、『大森介墟古物篇』の翻訳には注意を要する問題があり、後の節であらためて取り上げて論じる。

「古史学」は、ドイツ語辞典である小田条次郎・藤井三郎・桜井勇作編『字和袖珍字書』(1872(明治5)年序)——「字」は「字魯士」<sup>フロシア</sup>「字漏生」<sup>フロイセン</sup>の第1字——が Archäologie をそのように訳し

ている。ただし、「古史学」が文章中で archaeology を言うのに使われていると確実に言える用例は見出せない。「古史学」という語の用例はそれなりに見つかるが、その多くは古代史の研究を表していると思われる。しかし、次の例における「古史学」は「人種学」とともに使われており、archaeology を表している可能性が比較的高い。

又学术界に涉りて、一步時勢に先じて目的を立て、当世に少しも流行せざる学科、即ち人種学或は古史学等を研究せんと志す者有り<sup>ちから</sup>と仮定せんに、仮令大半修業を積みて其意見を世に公にす共、其演説は聴く人無く、其著書は買ふ人無きに至らば、其人は終に学問研究中に路頭に迷ふ外無かる可し。(鈴木力『立身問答』、1893(明治26)年)

「好古学」は、英語使用者のための英語-日本語辞典 *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language, Compiled Originally by Ernest Mason Satow and Ishibashi Masakata (Revised and Enlarged by E. M. Hobart-Hampden and Harold G. Parlett)* 第3版(1904(明治37)年)に見られ、archaeology が「古物学、好古学」と訳されている。<sup>30)</sup>「好古学」が文章中で archaeology を表していると確実に言える例はなかったが、『大森介墟古物篇』で“gentlemen interested in archaeology”が「好古家」と訳されているのはそれに近い。

さらにまれな訳語もいくつかある。例えば、文部省編輯局編『露和字彙』(1887(明治20)年)は археологія (アルヒオロギヤ) を「古学、鑑古学」と訳している。野村泰亨他編『訂正仏和辞林』(1891(明治24)年)は、archéologie を「古典学、古物学、古事学、考古学」と訳している。ただし、「古典学」は字義的に考えて遺跡や遺物の研究ではないであろう——先に、classical education を「考古学」と訳した例を見た(3.3)——。「故物学」という訳語を示している辞書もあるが、それは単なる「古物学」の異表記であろう。

以上の種々の名称のいずれも archaeology の訳語として普及することはなく、「古物学」と「考古学」の陰でそのまま消えていった。

## 5. 「考古学」の成立(2) ——定訳化

前節における考察をふまえて、「考古学」が新しい archaeology の定訳として確立した——そして、それに伴って外延を縮小してもっぱら archaeology を表すようになった——ことについてその時期と原因などの問題について述べる。多数あった異訳のうち、「考古学」と比較すべき勢力を有していたのは「古物学」だけである。

### 5.1. 定訳化の時期

まれな諸名称を度外視すれば、当初「古物学」と「考古学」が併用されていたのが最終的に「考古学」だけが使われる状態に変わったと言えるわけであるが、その変化はどのようなタイミングで進化したのであろうか。

この問題について、柴田(1924)は「明治の初年から十四五年頃までは Archaeology を古物学と訳して使用された」と書いている。明治 14～15 年ごろまでという言明の根拠は示されていないが、続くくだりに『考古説略』が明治 12 年に出版されたことの説明があるので、同書の出版後間もなく「古物学」が廃れたと考え、その出版から少し後の時期を恣意的に選んで書いたということかも知れない。金関(1985)の、『考古説略』で「アーケオロジーが考古学と訳されて以来、古物学の名は廃れるようになった」という交代の時期に関して不明瞭な説明もそれに近い。また、角田(1954)も根拠を示すことなく「明治 20 年頃からは、『考古学』の語が専ら通用するようになった。」と書き、江上(1976)もそれをほぼその通りに引用している。しかし、結論から言えば、いずれも誤った想像の断定に過ぎない。

両名称の過去における使用頻度を正確に知るすべはないが、試みに国立国会図書館デジタルコレクションの Web サイト (<https://dl.ndl.go.jp/>) で対象期間を限定して全文検索したときに表示される件数——指定した名称を本文などに含む書籍の数——を整理してみると表 1 に示すような統計が得られる。期間の幅は 10 年としているが、1895 (明治 28) 年に考古学会が設立された 1890 年代だけは 5 年の幅としている。<sup>31)</sup>

表 1 「古物学」から「考古学」への移行

	「古物学」	「考古学」	「考古学」の比率	備考
1860～1869(万延1～明治2)年	0	0	—	
1870～1879(明治3～12)年	19	8	29.6 %	
1880～1889(明治13～22)年	244	136	35.8 %	
1890～1894(明治23～27)年	232	164	41.4 %	
1895～1899(明治28～32)年	132	403	75.3 %	1895年 考古学会設立
1900～1909(明治33～42)年	373	1471	79.8 %	
1910～1919(明治43～大正8)年	385	3154	89.1 %	
1920～1929(大正9～昭和4)年	323	8235	96.2 %	
1930～1939(昭和5～14)年	317	17761	98.2 %	
1940～1949(昭和15～24)年	200	14389	98.6 %	

万全の調査と言うには程遠いが<sup>32)</sup>、「考古学」の比率が単調に増加している様子から統計にそれなりの信頼性があると判断して言えば、archaeology 導入の初期の段階では「古物学」が優勢であったが、1890 年代の後半、すなわち、考古学会の設立後に形勢が逆転し、「考古学」が

20世紀前半のうちに「古物学」に取って代わったことが分かる。ただし、注意すべきは、「考古学」の比率は考古学会の設立前から一貫して増加を続けていることである。これは、「考古学」への移行が同学会の設立によって始まったわけではないことを意味している。すでに使用の比率の高まりつつあった「考古学」の名が学会名として選ばれ、それによって交代がさらに進んだということだと考えられる。

念のために付言すれば、表1では例えば1940年代における「考古学」の比率が100%ではなく98.6%になっているが、これは当時まだ「古物学」を使う人が少数いたということを必ずしも意味しない。統計の数値は先行する時期の著述の引用や再刊本——まれには、考古学の名の歴史に関する議論——などにおける古い名称の出現も含んでいる。

## 5.2. 交代の原因と含意

当初優勢であった「古物学」の名が「考古学」に取って代わられたのはいかなる理由によるものであったのか。上述の通り、考古学会の設立は名称の交代を促進し完成させる効果を持ったにせよ、交代は学会設立前から進行していた。

その疑問の解決に役立つ当時の記述は見出すことができなかったが、後年における2種類の意見表明はあった。その1つは柴田(1924)におけるもので、古い翻訳書などには「古物学」と書かれているが「必ずしも古物のみを研究する学問にあらず、学名としては不適當の点ある処より、其以後には考古学と云はるゝことゝ為つた」と説明している。必ずしも古物だけを研究する学問ではないというのは、続く文脈で「考古学の材料」について述べる中で、“遺跡と遺物の2つが考古学の主要な材料であるが、ほかにも地層や文書記録も参考とすべきものはすべて利用する”と説明されているので、そのことを指すと見られる。「古物学」の名では研究に使う材料を必要以上に限定した説明になるためにそれが使われなくなったという意見である。

さらに後になってから言われるようになったもう1つの意見は、駒井(1951)、角田(1954)、関野(1968)に見られる、「古物学」は古物商の連想を持つから学問名としてふさわしくないというものである。駒井は加えて、日本の考古学の隆盛は「考古学」の名が選ばれたおかげであるとまで言う。

私はつねづね Archaeology の訳として考古学ということがいわれだしたことが、日本でこの学問を盛んにした理由の一つと思っている。もしこれを古物学などといつていたら、いかにも古道具屋か屑屋にでも関係あるようにみえて、この学問の発達をさまたげたであろう。まことに我が国の考古学は(中略)順調に発達して、今日の隆盛をもたらしているのであるが、ちよつとしたことではあるが、名称の影響は大きいと思われる。(駒井(1951))

明治20年頃からは、『考古学』の語が専ら通用するようになった。<sup>33)</sup>多分それは、『古物学』の古物が『古物商』の古物と同語であり、厳正なるべき学の名として『古物学』は、いささか適切さを欠くと思われたからであろう。(角田(1954))

もし、こういう名称【＝「古物学」】が今日まで続いていたら、考古学者は古道具屋の親分みたいな感じで、さぞ滑稽であろう。(関野(1968))

しかし、駒井、角田、関野はいずれも20世紀の生まれであり、以上の考えはすべて「～と思っている」「～であろう」と書かれている通り、「考古学」の定訳化の30～40年後に考古学の世界に入った研究者の推定に過ぎない。他方、柴田は1877(明治10)年の生まれであり、研究を始めた時期には学界に「古物学」の記憶がまだ残っていた可能性があり、少なくともその点で言えば信憑性が相対的に高い。しかし、いずれの説にせよ、あるいは、それら以外の考えにせよ、それが今もっともらしく感じられるかどうかという基準で当否を判断することはできない。

この問題の解決は信頼に足る19世紀の証拠を見出すことができない限り不可能である。もし「考古学」が廃れて「古物学」が定訳となっていたとすれば、論者たちはほかの理由を挙げてそのことを説明しようとしたであろう。角田を含む複数の考古学研究者が「古物学」を優れた訳語として賞賛していることはすでに見た通りである。「古物学」にも「考古学」にも長短の両面がある以上、どちらの名称が選ばれても説明を付けることができる。要するに単なる結果論である。

「古物商」の連想という常識的な発想による説明は確かに分かりやすい。1883(明治16)年にはそれまでの「古着<sup>ふるかね</sup>古金等渡世ノ者取締規則」や「八品<sup>はっぴんしょう</sup>商取締規則」<sup>34)</sup>に代わる「古物商取締条例」が布告され、翌年に施行されている。それによって「古物」の語に新たな含意が生じ、「古物学」の研究者がその名称を避けたいと思うようになったという可能性は想像することができる。しかし、表1の1880年代の区間を二分して統計し直してみても、条例の布告、実施以後に「考古学」の比率が高まったという事実は認められなかった。坪井(1889)は条例施行の数年後の講義録であるが、そこでは「古物」という表記について「訓読シテふるものト云ヘバ何ト無ク卑ク穢ゲニ聞エ音読シテこぶつト云ヘバ何所ト無ク雅致ガ有ル様ニ思ハレマス」と述べられている。和語の「ふるもの」——通常破れ鍋や欠け茶碗などを指すと例示されている——は印象が悪いのに対し、漢語の「古物」は「何所ト無ク雅致ガ有ル」という説明であり、現に講義中で「古物古跡」などの表現が繰り返し使われている。坪井正五郎<sup>しょうごろう</sup>は考古学会設立の中心人物の1人であり学会の命名者でもあるが(八木(1935))、「古物」の語に問題があるとは考えていなかったことが分かる。また、もし「古物」の与える印象が悪ければ、徳川家歴代の霊廟の

保存費用を補うことを目的として1890（明治23）年に開かれた「尚徳古物展覧会」がそう名付けられることもなかったであろう。<sup>35)</sup> そうしたことからすれば、「古物商」連想説はやはり有効な証拠が示されなければ単なる想像の次元にとどまると言わざるを得ない。

この問題を考えるうえで注意すべきは、大多数の人々は2つの名称を相対評価して選択を行ったわけではなく、単に他に従ったに過ぎないということである。教育の文脈で使われた名称は学生に大きな影響を与えたであろうし、学会の名称が決まれば以後の人はそれに従うだけである。そうした潮流を作った人々がいかなる思考に基づいて名称を選んだかは、今は不明である。<sup>36)</sup>

最終的に「考古学」の名称が選ばれたことの代償も大きかった。それは、研究対象を表す「古物」を捨て、「考古」という“古を考える”という所為を表す語、それも、考古学を特徴付けるにはあまりに外延の広い語を名称に使ったために、学問名によってその内容にかりそめの説明すら与えることができなくなったということである。すなわち、研究において昔時のことを考えることは歴史学を始めとする非常に多くの学問において行われるので、考古学を定義するには「考古」の字義ではまったく足りず、結局遺跡や遺物という“古物”の概念を必須の要素として持ち出して複雑な説明を行わなければならないからである。「言語学」を“言語の研究”、「歴史学」を“歴史の研究”としてひとまず簡単に説明できるのと事情が根本的に異なっている。「考古学」が早い段階において多様な学問を表すのに使われた——あるいは、使うことができた——のもまさに名称がそのように模糊としたものであったからにほかならない。上で触れた柴田(1924)も「考古学」を支持してはいるが、駒井らのように単純に肯定することはせず、「考古の字義から云へば古い事柄を推究すると云ふ位で、其範囲は史学上にも文学上にも尚ほ他の場合にも使用さるべきもので、極めて漠然たるものであるから、之を Archaeology に当つるは未だ妥当ならざる点なきにあらざる」ことを的確に述べており、議論が周到である。<sup>37)</sup>

過去に作られた多種類の archaeology の訳語は、1節で触れた観点から2つの類に分けることができる。1つは研究対象を表す名に「学」を加えた「古事学」「古物学」「古器物学」「古学」「古史学」などであり、それらは「古({事/(器)物/史})学」のような一般形にまとめることができる——ここで{}はその中の要素を1つ選ぶこと、()はその中の要素を省けることを表す——。もう1つはその研究が成す所為を命名に使った「考古学」「好古学」「鑑古学」である。まとめれば「{考/好/鑑}古学」になるが、archaeology の訳語としての使用の実績がほとんどない「好古学」と「鑑古学」を除けば、やはり「考古学」が唯一の例外的な名称であることになる。

## 6. 「古物学」「考古学」と「好古学」

以上の諸節において「好古学」や「好古家」の語に触れる機会が何度かあったが、論述の複

雑化を避けるために立ち入った議論は控えてきた。しかし、それらの語との関連において、「古物学」や「考古学」の名の正確な理解のために考えなければならない重要な問題がある。

和田(1932a)は、モースの『大森介墟古物篇』(1879(明治12)年)において訳者の矢田部良吉が archaeology を「古物学」と訳していると述べている。金関(1985)、角田(1986)、辺見(1986)も同じことを述べている。同書に「古物学」は現に出て来るのでそれは誤りであるわけではないが、実は archaeology の訳語の使用に関する浅い理解であり、読者を誤解に導く記述でもある。同書の翻訳をその原著である *The Shell Mounds of Omori, Japan* における原文と対照してみることによってそのことが明らかになる。

*The Shell Mounds* では、archaeology やその派生語が筆者の見落としがなければ 10 か所に現れる。しかし、そのうち『大森介墟古物篇』において「古物学」を使って訳されているのはわずか 3 か所だけである。それら以外のところでは、先に触れた通り(4.3)、例えば“gentlemen interested in archaeology”は「好古家」と訳され、別の箇所に現れる archaeologist は「古学家」と訳されている。

筆者の見るところによれば、その訳し分けは気紛れや不注意によるものではない。それは、明治初期の大学に籍を置く研究者たちの在野の古物研究者に対する優越や対抗の心理が生み出した結果であった。清野(1944, 1954)は、日本では江戸時代の後半に遺物、遺跡の観察に基づく古文化の研究が発達したと述べ——そのような研究では「考古」と同じく中国語の表現に基づいて作られた(日本語では)同音の「好古」の語がしばしば使われた——、明治に入って西洋式の考古学を学び始めた日本の「新学徒」たちが取った態度を次のように評している。

此少壮学者達は余りに欧米心酔であつた。彼等は江戸時代の日本考古学に学ぶ可きものなしと頭から決めたらしかつた。従て彼等は江戸時代の考古学に無学であつた。

(清野(1944))

日本の新人類学新考古学は江戸時代考古学人類学の発達を、殆んど無視した。(中略) 明治の人々は欧米の学問を学ぶに急であつて、日本在来学を顧慮する余裕を持ち合さなかつた。

(中略) 此日本旧好古学を軽視するの過誤は伝承して今日に及んで居る。(清野(1954))

新学徒、より広くは当時の大学研究者の意識がそのようなものであったと考えれば、『大森介墟古物篇』における訳語の使い分けの根拠を明瞭に理解することができる。「古物学」という訳語の 3 度の使用のうち、説明の容易なものから言えば、まずダーウィン『種の起源』の刊行の刺激によって太古の歴史の研究が盛んになり、“Anthropology, Archaeology and Ethnology”関係の学会が多く作られ雑誌も刊行されるようになったという欧米の学問の潮流に関する

説明において archaeology が「古物学」と訳されている。また、“an accomplished English archaeologist, Mr. Borlase”として英国の考古学者に言及した箇所では、「古物学ニ<sup>(ふか)</sup>邃キ名士」という言い回しを使って訳している。もう1つは、“本書によって日本の先史の陶器に関する知識を世に広く知らしめることができることに関して archaeologists は出版を支援してくれた加藤弘之総理(東大総長)らに恩義を負う”と述べた謝辞において、当の語を「古物学士」と訳している。archaeologists と不定の複数形で書いているが、当然その中心はモース自身である。注目すべきは、いずれの場合も西洋の学問や研究者に言及する文脈において「古物学」が使われていることである。

それに対して、モースが日本ほど archaeology に対する世間の関心の高い国はほかにないと言及しつづける——“there is no other country in the world where so great a number of gentlemen interested in archaeology can be found as in Japan”——では“gentlemen interested in archaeology”は「好古家」と訳されている。“古物学に関心を有する人士”ではないのである。また、モースはそのような人々が“an Archaeological Society”を組織して定期的に会合を開いていると書いているが、翻訳は“古物学の会”ではなく、「有志ノ士会社シ期日ヲ定メ相会シテ」である。そして、“native archaeologists”（日本の archaeologist たち）が古物の精細な図集を多数出版しているという話は「一二ノ古学者」の所為として訳されている。日本の古物研究の文脈では意識的に「古物学」の使用を避けていることが明白である。<sup>38)</sup>

モースにとって研究上興味を引かれる日本人、価値ある情報源は、西洋の学問の駆け出しの研究者や学生ではなく、研究の手法は古いにせよ日本の古物に関する豊富な収集と考察の実績を有する「好古家」たちであったはずである。実際、著述中には好古家から学んだ知識や用語が述べられており、英語の原文中に好古家を見下すような要素はない。<sup>39)</sup>しかし、新学徒たちは——と言っても、訳者の矢田部は植物学者であり、考古学徒ではないが——そうした世界は視野の外に置き、西洋から新しく学んだ学問だけが archaeology であることにしたかったということだと考えられる。別の言い方をすれば、新学徒たちは archaeology という語の外延を独自に狭め、その限定的な部分にだけ「古物学」の名を適用したということである。坪井正五郎も八木(1898)に寄せた序で「弄古、好古、尚古」の所為に学問的な価値がないことを力説している。とすれば、「古物学」や「考古学」は実は archaeology の忠実な訳語であるわけではなく、それらが表すのは新学徒たちの設けたフィルターを通過した archaeology の要素だけであったことになる。

『百科全書 古物学』からの引用のところで見たように(3.3)、その原著は archaeology を新しい手法による“好古家の探求(the pursuits of the antiquary)”として説明していた。西洋人は、archaeologist と antiquary (あるいは antiquarian) を完全に同一視していたわけでは

ないにせよ、両者が排他的な概念であるとは考えていなかった。モースも日本の好古家を言うのに “gentlemen interested in archaeology” と書きつつ、別のところでは antiquarian の語を使っている。しかし、新学徒たちは archaeologist と antiquary のあいだに明確な一線を画することを望んだ。<sup>40)</sup>

先に archaeology の理解の時代差や地域差のために、archaeology の訳語か否かという基準が一定した意味を持ち得ないことを述べたが (2.2)、archaeology の外延が日本で狭められるという事情まで加わったとすれば、当の基準はさらに扱いにくいものであることになる。

英語-日本語辞典 *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language* 第3版 (1904 (明治37) 年) においては archaeology が「古物学、好古学」と訳されていることを上で見た (4.3)。archaeology に「好古学」の訳語を与えたのは確認の限りこの辞書だけである。これもまた archaeology に関する西洋人と日本人の認識の差の反映である可能性がある。この辞書は同名の辞書の第2版を前出の完全書名中に名のある英国総領事館員 E. M. Hobart-Hampden と英国公使館員 Harold G. Parlett が増補したものである。<sup>41)</sup> 両名の認識において archaeology を表す日本語が「好古学」であったか、もしくは、「好古学」とも「考古学」とも書けるコウコガクであったかのいずれかであろう。ただし、archaeologist と archaeological はそれぞれ「古物学者」「古物学的」とされて訳法が一貫していない、後の第4版 (1919 (大正8) 年) では「好古学」が「考古学」に変更されているなど状況が複雑で、同辞典の訳語について今論じ得ることは限られている。

## 7. おわりに

「考古学」という学問名の成立過程および関連する諸問題について筆者の考えるところを述べた。詳細は本文に記した通りであるが、「考古学」が archaeology の訳語として定着するまでの期間における各種の初出に関する情報を一覧できる形にまとめれば表2のようになる——「初出」は無論調査によって用例を確認できた範囲での初出ということである——。「考古学」が普及する前に広く使われていた「古物学」に関する情報も併せて示す。背景を暗くしてあるのは従来考古学研究によって言われてきた初出の情報である。

今後新たな証拠の発見によってここで述べた「考古学」の歴史がさらに正確なものになることを期待したい。少数の用例や既知の情報に基づいて言えることは自ずと狭く限られ、根拠のない断定は論の学術性を損なう。語史の解明のためには過去における語の使用に関わる事実をできるだけ多く発掘し、それに慎重な検討を加えることが必要である。<sup>42)</sup>

表2 「考古学」の語史里程標

	資料名	出現形(+原語)	説明
1725(享保10)年	丘瓊山 故事彫龍(和刻本)	考-古-之学	「考-古-之学」漢文初出
1782(天明2)年	湯浅常山 文会雑記	考古ノコト	「考古」日本語文初出
1816(文化13)年	檜山義慎 花押譜	考-古-之学	「考-古-之学」日本漢文初出
1869(明治2)年	栗本鯤 菴菴十種 曉窓追録	攷古ノ具(archéologieを意識?)	「考古」西洋に関わる日本語文初出
1872(明治5)年	吉田賢輔 英和字典	古物学(archaeology)	「古物学」辞書初出
1873(明治6)年	田中不二麿 理事功程	古物学(archéologie)	「古物学」文章初出
1874(明治7)年	秋山恒太郎訳 百科全書 人種篇	考古ノ学問(palacontology)	「考古の学問」初出
1875(明治8)年	モンテスキュー 方法精理	考古学(antiquityに基づく意識)	「考古学」初出
1877(明治10)年2月	柴田承桂訳 百科全書 古物学	古物学(archaeology)	「古物学」初出
1877(明治10)年12月	田中不二麿 大森村古物発見ノ概記	考古学、古物学	「考古学」初出
1879(明治12)年2月	朝野新聞 仏国博覧会景況略報	考古学(archéologie)	archaeologyを表す「考古学」初出
1879(明治12)年6月	H・シーボルト 考古説略	考古学(archaeology)	archaeologyを表す「考古学」初出
1886(明治19)年	高良二他 独英和三対字彙大全	考古学、古物学(Archäologie)	「考古学」辞書初出

注

- 1) 主要な学問名——大学の学部や学科の名に広く使われているような名称——のうちに「考古学」と同じ語構成の型を持つ学問名はない。範囲を広げて探せば「養豚学」のような同型の名が少数見つかるとは、それとて表す意味は「豚を育てる」学問ではなく「豚の育成を研究する」学問であろう。

漢字2字の学問名には研究対象の名に基づくとは単純に言えないものがいくつかある。例えば、「化学」の「化」はそもそも研究対象を表す名詞ではなく、「文学」も「文」を研究対象とするわけではない。「哲学」も特殊であるが、その名は西周らが当初考えた「希哲学」という訳語が縮められたものであることが麻生(1942)以来知られている。「希哲」は「哲たることを希<sup>ねが</sup>う」ということであるから、「希哲学」は語構成の型と意味のあり方の両面に関して「考古学」に共通している。なお、「化学」と「文学」の語史についてもすでに多くの研究の蓄積がある。

- 2) 入華英国人宣教師アレクサンダー・ワイリー(Alexander Wylie、中国名偉烈亜力)らが出版した定期刊行物『六合叢談』(1857～1858(咸豊7～8)年)——書名にある「六合」は「世界、宇宙」の意、同誌の内容の一部は幕末の日本で和刻本『官板六合叢談 刪定本』として刊行された——は近代科学に関する各種の情報も伝えたが、そこに archaeology の話題はない。『六合叢談』に先行して出版された複数の同種の刊行物や、入華英国人宣教師ジョン・フライヤー(John Fryer、傳蘭雅)らによる漢訳洋書の叢書である『江南製造局訳書彙刻』(1868(同治7)年～)においても状況は同じである。

外遊記の類には archaeology に関わる見聞が散発的に出現する。例えば、1876～1879(光緒2～5)年における英仏両国への派遣の記録である郭嵩燾『倫敦与巴黎日記』——確認は鍾叔河編『走向世界叢書』第2版(岳麓書社、2008年)の第4冊における翻字による——には、「西洋考古者」(西洋の考古学者)や「考古者多就古城遺址考証推求」(考古学者は多く古代都市の遺跡について考証研究する)などのくだりがある。ただし、それらの「考古者」は「古を考える者」を表す中国語の一般的な句に過ぎず、また、記述中に「考古学」という学問名の使用も見出せない。

- 3) 書名中の Punti は広東を表す「本地」の広東語読み。同辞典は中国語の訳語に広東語と官話両様の発音を示している。
- 4) archaeologist は「博古者」と訳されている。

- 5) 『俄漢合璧増補字彙』の「考古学」は日本語からの借用である可能性もある。しかし、それを断定できる証拠はなく、独自にそう訳された可能性も排除できない。同辞典以後における「考古学」の使用は、日刊紙『申報』の1899(光緒25)年8月21日の号に載った「巴黎賽会」(パリ万国博覧会)という短信に見られる。そこにおける国際学術会議の学問分野名の列挙は日本の「臨時博覧会事務局告示第二十二号」(1899(明治32)年7月29日)として公示された「千九百年ノ博覧会ニ於ケル万国学会芸会議条例」の記述にほとんど一致するので、日本語の「考古学」を踏襲したものだとはほぼ確実に言える。
- そうした事情および19世紀末以後の一時期に日本語の語彙が中国語に大量に流入した事実を考えれば、中国における「考古学」の名の普及はおそらく日本語の影響によると言ってよいであろう。
- 6) 「考古学」の現れが archaeology の訳語か否かという基準は厳密には翻訳の文章にしか適用できない。ここではそれを archaeology に相当する意味で使われているか否かという基準として読み替える。
- 7) 表外字の「攷」は今ではほとんど使われないが、過去の文献ではしばしば「考」と混用されている。例えば、呉(1926)には「考古学」と「攷古学」の表記がともに出て来る。中国語においても同様で、張編著(1930)は書名や標題では「考古学」を使っているが、文中には「攷古学」も頻出する。
- 8) 括弧内に小字で添えた解釈は松田校注(2009)による。
- 9) 図1は国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/>)で公開されている画像による。
- 10) 栗本は日本でフランス人宣教師、通訳のウジェーヌ・エマニュエル・メルメ・カション(Eugène-Emmanuel Mermet-Cachon)に日本語を教えた経験を持つ。メルメ・カションとのあいだで交わされたフランス事情に関する問答を記録した『匏菴十種 鉛筆紀聞』(1861(文久1)年題言、1869(明治2)年刊)の「題言」にそのことが書かれている。
- 11) いずれの文書も国立公文書館デジタルアーカイブ(<https://www.digital.archives.go.jp/>)で画像が公開されている。
- 12) 著者名は母利(2001)による。表紙の見返しに「東京伊藤氏蔵」とあるが、著者名は記されていない。
- 13) 確認は、扉に「NEW EDITION」と書かれているが版数と刊行年の表示のない版——おそらく第4版——の第2巻による。『百科全書 人種篇』の訳文は同版の文章の構成や表現によく対応している。国立国会図書館デジタルコレクションで文部省編輯局『文部省出版書目 明治14年3月』(出版年不詳)として画像が公開されている出版目録も『百科全書』の底本を「無年紀」と説明している。
- 14) 確認は *The Works of Jeremy Bentham, Published under the Superintendence of His Executor, John Bowring* 第1巻(1843年)による。
- 15) 出版月は『文部省出版書目 明治14年3月』(注13)の記述による。書籍には記されていない。
- 16) 原文は“The recent adoption of this term to characterise the pursuits of the antiquary marks a new era in the study of antiquities, in which it has been reduced to an intelligible and comprehensive system based on philosophic induction.”である。確認は『百科全書 人種篇』のところで用いた版による。
- 17) the Society of Antiquaries of London は日本語ではさまざまに翻訳されている。直訳に近い「ロンドン好古家協会」「ロンドン古物研究家協会」に加えて「ロンドン好古学協会」「ロンドン古代学協会」「ロンドン考古協会」「ロンドン尚古協会」などの訳語が見られる。
- 18) 当該文書の全文を引用し、その存在を知らしめた著述としては、佐原(1977)よりはるかに早く中島(1938)などがある。
- 19) 現在の所蔵機関名は正確には東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫。図2は東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『朝野新聞 縮刷版』9(ペリかん社、1982年)による。

- 20) 報告者がフランス語の長い挨拶をこれほどまでに正確に聞き取って記録できたとすれば驚きである。筆者は挨拶文が印刷物の形で式典出席者に配布されたものと推定するが、そのような記録は見出せなかった。
- 21) 理屈のうえでは『朝野新聞』の無署名の報告記事の著者が『考古説略』の緒言を書いた吉田正春であったという可能性も考え得るが、松本(1977)によれば吉田は第3回パリ万博の開会の時期には東京にいた。
- 22) 本書はドイツ人 Theodor Bernhad Welter の著した書籍をオランダ人が翻訳したものをさらに日本語に翻訳したものである。文中の「安底幾的」は英語の antiquity を音訳したものと見られるが、オランダ人による翻訳書を確認できていないので確かなことは言えない。
- 23) 学生がモースの指導を受けたことは、両名の英語論文 'Okadaira shell mound at Hitachi' (1882(明治15)年) に記されたモースへの謝辞によって確かめられる。
- 24) 前年の小山篤叙編『学校用英和字典』(1885(明治18)年) は diplomatics (古文書学) を「考古学」と訳している。
- 25) archaeology やそのギリシャ語の原語が表すのは単に古代の学ということであり、「古物学」が語義通りの翻訳であるわけではない。浜田(1922)にも archaeology の語義に関して斎藤(1974)と同旨の説明が見られる。
- 26) この辞書は同年に同じ版を使った知新館社友同訳『英和字典』としても出版されている。いずれにも「社友吉田賢輔」による序文がある。
- 27) 「ニュッタル」はおそらくオランダ語式の読みであろう。
- 28) 吉田賢輔編『英和字典』に antiquities の項目はないが、その誤記と思しき antique という項目があり、「古物、遺跡」と訳されている。
- 29) 当時の英国の著名な考古学者 John Lubbock を紹介した記事。
- 30) 実際には訳語はまずローマ字で書かれ、それに漢字表記が添えられている。
- 31) 『百科全書』の各冊の末尾には全冊の目録が載っており、そこに現れる「古物学」が統計に影響を与えるのを避けるために、書名に「百科全書」を含むものは『古物学』を例外として統計から一律に除外した。調査は2024年12月中旬に行った。
- 32) この調査の問題点に関する議論は省く。表1に書かれた書籍数に関わる重要な1点を記せば、「古物学」と「考古学」を両方含む書籍は二重に数えている。もっとも、その数は少なく、それを省いて統計し直しても「考古学」の比率の推移に大きな影響はない。
- 33) 「考古学」への統一がそれほど早く進んだわけではないことはすでに見た通りである。
- 34) 「八品商」は同規則の定めるところによれば質屋、古着売買、古銅鉄売買、古道具屋など19種類の業者の総称。「八品」の名は江戸時代からの継承による。
- 35) 同展覧会の発起人書状(同年3月5日)および新聞広告「尚徳古物展覧会出品方広告」(『読売新聞』同年3月15日)による。栗本鯤(3.2)を筆頭発起人とする書状は九州国立博物館対馬宗家文書データベース(<https://souke.kyuhaku.jp/>)で「尚徳古物展覧会発起人書状」と題して画像が公開されている。
- 36) 教育との関連で付言すれば、『百科全書 古物学』が日本に初めて考古学を伝えたと説明されるが、同書は一般向けの百科辞典の1項目であり、考古学を定義的に説明した冒頭の短い一節を除けばその内容は世界各地の古跡古物の紹介である。考古学の課題や方法に関する話はなく、学生を直接研究に導く役目は果たさなかったであろう。角田(1961a)は「当時の若い学徒たちは、『百科全書』をむさぼり読んだようである」と言うが、根拠あつての発言なのか単なる想像なのかは不明である。
- 37) 「考古学」の名称には考古学外からの批判もあった。黒板(1907)は考古学会の大会での講演録であるが、黒板はそこで歴史研究者の立場から「考古学」の使用に異議を唱え、「考古学といへば古いことを考へるやうに

も聞え、歴史と混同しはせぬかと思ひますから、どうしても考古学といふ名称は適当せぬ様に思はれます。」と述べている。

- 38) 原文中の“Mr. Ninagawa, the distinguished antiquarian”は「古物」を使って「有名ノ古物家蜷川氏」と訳されている。しかし、「古物学」と「名士」「士」を使った「古物学ニ遂キ名士」や「古物学士」の翻訳とは扱いが異なる。ちなみに、H・シーボルトの *Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age* (1879 (明治12)年) は同人物蜷川式胤<sup>のりたね</sup>を“the Japanese archaeologist Ninagawa”と書いている。

ほかに、『大森介墟古物篇』で原文の“the Archaeological Museum of the University of Tokio”は「本部【＝理学部】ノ博物場」と訳されている。しかし、これは『東京大学法理文学部一覧 明治十三、四年』(1880 (明治13)年)の記述に基づいて判断すれば、当該の Museum に Archaeological cabinet ——日本語名は「古器物室」——があったことからモースが“the Archaeological Museum”と表現したのを施設の日本語名によって「博物場」と訳した——Archaeological を省いた——ものであり、訳者の評価の意識には関係しない。

- 39) モースの日本回想録 *Japan Day by Day* 第2巻 (1917年) には、蜷川式胤が日本人は古物に対する姿勢が西洋人ほど体系的、科学的ではないと(解し得ることを)語ったと述べられているが、モースが好古家を批判した言辭ではない。

- 40) 参考までに付言すれば、『百科全書 古物学』の原著である *Chambers's Information for the People* の 'Archaeology' の項目には archaeology やその派生語が約30か所に現れるが、翻訳では「古物学」「古物学士」などのように一貫して「古物」を使って訳されている。

- 41) 両名の身分は同辞典の奥付における記載による。

- 42) 学問名ではなく「考古」の語自体の歴史の観点から注目に値することがあり、それをここに簡単に記す。「読書」という中国語の動詞句に由来する「読書」の語は「読書する」という複合サ変動詞としても使われる。遅くとも明治初年にはすでにその用法が普及していたことを確かめることができる。これに対して、「考古」が「考古する」という動詞の形で使われることは相対的に少なく、使用開始も遅い。明治初期の「考古ノ具」(『匏菴十種 曉窓追録』)や「考古ノ志」(『考古説略』)などの言い回しの例からも「考古」が動詞的概念を表すものと理解されていたことが分かるが、「考古する」という動詞の普及は20世紀に入ってからである。

「考古する」には2種類の用法があり、「余が考古するには」(河合健三『西江原村史』、1912 (明治45)年)では自動詞、「広く山陰山陽ノ天然風土生物ヲ考古シ」(藤卷正之編『国幣中社中山神社史料』、1923 (大正12)年)では目的語を取る他動詞として使われている。「考古」は動詞「考」と目的語「古」の組合せであり、「考古する」は本来目的語を必要としない自動詞である。そこに新たに目的語を加えて他動詞として使うのは、日本語の同類の語に広く見られる文型の拡張の現象である(拙論(2022))。

## 参考文献

麻生義輝(1942)『近世日本哲学史』(近藤書店)

江上波夫(1976)「考古学とはどんな学問か」江上波夫監修『考古学ゼミナール』(山川出版社)

大津忠彦(2007)「明治期先覚者吉田正春とその事績」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第17号

大津忠彦(2012)「外来語『アルケオロジー』再考—用語『考古学』発現初期の様相—」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第7号

金関 恕(1985)「世界の考古学と日本の考古学」近藤義郎他編『岩波講座日本考古学1 研究の方法』(岩波書店)

金関 恕(1997)「遺物の考古学・遺跡の考古学」『古事』第1冊(天理大学考古学研究室)

- 清野謙次 (1944) 『日本人種論変遷史』 (小山書店)
- 清野謙次 (1954) 『日本考古学・人類学史』 上巻 (岩波書店)
- 呉秀三 (1926) 『シーボルト先生—其生涯及功業—』 第2版 (吐鳳堂書店)
- 黑板勝美 (1907) 「考古学に対する予の雑観」 『考古界』 第6篇第9号 (考古学会)
- 駒井和愛 (1951) 「序説」 駒井和愛編 『考古学概説』 (世界社)
- 斎藤忠 (1974) 『日本考古学史』 (吉川弘文館)
- 佐原真 (1977) 「大森貝塚百年」 『考古学研究』 第24巻第3・4号 (考古学研究会)
- 佐原真 (1988) 「日本近代考古学の始まるころ—モース、シーボルト、佐々木忠二郎 資料に寄せて—」 守屋毅編 『共同研究 モースと日本』 (小学館)
- 柴田常恵 (1924) 『日本考古学』 (国史講習会)
- 沈国威 (1994) 『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』 (笠間書院) [「第4章 英学東漸と日本語借用語—英華辞書類を中心に—」]
- 関野雄 (1968) 『「考古学」と『発掘』』 『言語生活』 No. 201 (筑摩書房)
- 田野村忠温 (2020) 「漢語複合名詞の形成と再分析—動詞—名詞型複合名詞の二義性—」 『現代日本語研究』 第12号 (大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室) [拙著 (2023) に改訂再録]
- 田野村忠温 (2022) 「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響—『設計』の近現代語史—」 『大阪大学大学院文学研究科紀要』 第62巻 [拙著 (2023) に改訂再録]
- 田野村忠温 (2023) 『近代日中新語の諸相』 (和泉書院)
- 張梓旋 (2023) 『「発明」の成立と展開』 (大阪大学大学院文学研究科修士論文) [大阪大学学術情報庫 OUKA で公開]
- 陳力衛 (2011) 「近代日本の漢語とその出自」 『日本語学』 第30巻第8号 (明治書院)
- 陳力衛 (2019) 『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に—』 (三省堂) [「第1部 第5章 近代翻訳語の宝庫—英華字典」]
- 角田文衛 (1954) 『古代学序説』 (山川出版社)
- 角田文衛 (1961a) 「日本考古学の系譜」 『歴史教育』 第9巻第3号 (日本書院)
- 角田文衛 (1961b) 「柴田承桂博士と古物学」 『古代学』 第10巻第1号 (古代学協会)
- 角田文衛 (1986) 『角田文衛著作集 第1巻 古代学の方法』 (法蔵館) [「考古学の概念」]
- 坪井正五郎 (1889) 「日本考古学講義 (東京英和学校ニ於テ)」 『文』 第2巻第8号 (金港堂)
- 時枝務 (2006) 「近代の文化財保護と考古学」 『明治聖徳記念学会紀要』 復刊第43号
- 中島利一郎 (1938) 「明治天皇と大森貝塚出土品」 『武蔵野』 第26巻第7号 (武蔵野会)
- 中田祝夫 (1952) 「国語史上の一問題—漢語の源流について—」 『国語』 復刊第1巻第2号 (東京教育大学・東京文理科大学国語国文学会)
- 中田祝夫 (1954) 『古点本の国語学的研究 総論篇』 (講談社)
- 浜田耕作 (1922) 『通論考古学』 (大鏡閣)
- 平田健 (2008) 「H. v. シーボルト著『考古説略』と明治期の日本考古学」 『明治大学図書館紀要 図書』 第12号
- 辺見端 (1986) 「訳語“考古学”の成立—明治十年初見説をめぐって—」 『日本歴史』 第457号 (吉川弘文館)
- 松田清校注 (2009) 「晝窓追録」 『新日本古典文学大系 明治編 5 海外見聞集』 (岩波書店)
- 松本健一 (1977) 「在野ということの意味—吉田正春にふれて—」 『現代の眼』 第18巻第2号 (現代評論社)
- 母利司朗 (2001) 「開化文章」 小泉吉永編著 『往来物解題辞典 解題編』 (大空社)
- 八木斐三郎 (1898) 『日本考古学』 上編 (小林新兵衛)
- 八木静山 (斐三郎) (1935) 「明治考古学史」 『ドルメン』 第4巻第6号 (岡書院)

横山浩一 (1985) 「総論 日本考古学の特質」 近藤義郎他編 『岩波講座日本考古学 1 研究の方法』 (岩波書店)

和田千吉 (1932a) 「本邦考古学界の回顧」 『ドルメン』 4月号 (岡書院)

和田千吉 (1932b) 「本邦考古学界の回顧 二」 『ドルメン』 5月号 (岡書院)

張鳳編著 (1930) 『考古學』 (國立暨南大學文學院)

(人文学研究科名誉教授)